主論文の要約

論文題目

インドネシアにおけるプンガジアン・クルアーン（イスラーム基礎学習）の組織化
—クルアーン読誦学習テキスト『イクロ』の創案と普及に着目して—

中田　有紀

本研究は、プンガジアン・クルアーン(pengajian Qur'an)という、インドネシアにおけるイスラーム基礎学習が組織化された経緯を、クルアーン読誦学習テキスト『イクロ』の創案とその普及に着目して明かにすることを試みたものである。

プンガジアン・クルアーンとは、地域のモスクなどで、主として6歳以上の子どもたちが、礼拝の仕方や基本的なイスラームの規範・倫理とともに、クルアーンの読誦方法を学ぶ、イスラーム基礎学習を指す。プンガジアン・クルアーンにおいて、もっとも重視され、学習方法が時代とともに変容したのが、クルアーンの読誦学習である。プンガジアン・クルアーンの営みにおいて、クルアーン読誦学習の取り組み方が大きく変化する契機となったのは、クルアーンの読誦学習に特化したテキストが創案されたことだった。インドネシアでもっとも普及したのが、『イクロ』だった。本研究は、『イクロ』がジョグジャカルタで創案され、クルアーン学習施設で活用されるようになり、それが、バンドンで結成されたBKPRMI（インドネシア・モスク青年交流会）によって、全国に普及していく経緯を通して、これまで十分に明らかにされていなかったプンガジアン・クルアーンの組織化の実態を解明した。

「第Ⅰ部　ジョグジャカルタにおけるイスラーム教育の改革」（第1章、第2章）では、アスアド・フマムが、『イクロ』を創案するに至った社会・文化的背景として、ジョグジャカルタにおけるイスラーム教育の改革の過程を考察した。

第1章では、近代教育のシステムが20世紀初頭にオランダによって導入されたことに対し、ジョグジャカルタの町では、プリブミ（土着の人々）のムスリムらは、それらを拒絶せず、新しい学習システムや方法を導入していたことを明らかにした。ジョグジャカルタは20世紀初頭に、イスラーム改革派組織のムハマディヤーが結成された町としても有名である。本章では、イスラーム改革派を主張する組織ムハマディヤーを結成したアフマド・ダハランも、伝統派の思想を重んじてきたプサントレン・クラピヤの運営者らも、新しい教育システムや方法を導入し、時代にあったムスリムのための教授・学習の環境を整えることに努めていたことを論じた。

第2章では、独立直後のジョグジャカルタで、プリブミのエリートたちによる初めての大学であるガジャマダ大学とインドネシア・イスラーム大学の創設と発展の経緯とともに、両大学が、創設当初から1960年代頃まで、インドネシアの独立を象徴する意味が付与されたシュハダ・モスクを活用していたことを明らかにした。ジョグジャカルタにおいて、プリブミによる独立直後の高等教育機関の創設と発展は、高等教育の機会を得たムスリム学生たちが主体的に活動するモスクの創設や活動の充実と深く関わっていたことを明らかにした。

「第Ⅱ部　ジョグジャカルタにおける『イクロ』創案とその経緯」（第3章、第4章）では、アスアド・フマムが、若者たちとともに、『イクロ』を創案し、『イクロ』を活用するクルアーン学習施設を開設していく経緯（第3章）と、『イクロ』に先行して創案されたテキスト『キロアティ』と『イクロ』との比較によって、『イクロ』が、従来のクルアーン読誦学習では見られ

なかった、学習者中心の指導方法を導入したことを明らかにした（第 4 章）。

まず第 3 章で、アスアド・フマムがクルアーン読誦学習テキスト『イクロ』とそれを用いて学習を行うクルアーン学習施設を創設するまでのプロセスにおいて、若者たちが重要な意味を持ったことを明らかにした。1980 年代前半、アスアド・フマムが、クルアーンの学習指導を行う組織として AMM を結成し、ジョグジャカルタおよびその周辺地域におけるクルアーン学習の活性化の一役を担った。アスアド・フマムはイスラームを重んじた企業活動に従事し、その利益を活用して『イクロ』を創案し、『イクロ』を用いた学習を行うクルアーン幼稚園を開設した。その際、AMM のメンバー、すなわちジョグジャカルタ内外で育った大学生らとともに、クルアーン学習の改善と組織的な運営を試みた。個人のカリスマ性やリーダーシップ能力を尊重してきたプサントレンにおける学習の伝統とは異なり、アスアド・フマムは、若者の活力と彼らがもつネットワークを生かし、それをサポートすることで、クルアーン幼稚園をはじめとする新しいクルアーン学習施設での学習の形態を生み出した。

第 4 章では、アスアド・フマムが創案した『イクロ』と『キロアティ』の比較を行った。その結果、テキストの内容や構成に大きな違いは見られなくとも、両テキストの指導方針や教師の役割は大きく異なることを明らかにした。両テキストの創案の背景として、テキストが創案された町の地域性や創案者の学習経験との関係をみると、『キロアティ』は、師から弟子への直接指導を重んじる、ジャワで発展したプサントレンにみられるようなイスラーム学習の伝統を尊重したが、『イクロ』は、新しい指導方法を積極的に取り入れ、学習者主体で学ぶことを奨励するテキストとして作成されていた。ジョグジャカルタには、20 世紀初頭から、近代的な教育を積極的に取り入れてきた歴史がある。新しい要素をムスリムのための学習に早くから取り入れてきた地域性は、『イクロ』の指導方法や教師に求められる役割に反映されていることを論じた。

「第Ⅲ部　プンガジアン・クルアーンの標準モデル構築とその経緯」（第 5 章、第 6 章、第 7 章）では、『イクロ』を活用するクルアーン学習施設がジョグジャカルタから全国規模で普及することに大きな役割を果たした BKPRMI がバンドンで結成された経緯と、普及活動に多くの学生が関与したこと、さらにクルアーン学習施設における学習指導と運営の標準モデルが構築されたことの意義を論じた。

第 5 章では、BKPRMI が、1977 年にバンドンで結成された社会・政治的背景として、高等教育機関における宗教教育の必修化に関する課題や都市部でのダッワの展開の経緯を明かにした。また、BKPRMI は、ジョグジャカルタの『イクロ』を活用するクルアーン学習施設の全国普及を組織全体の活動とし、それが、反共の立場にあった当時の政府関係者に容認されたことで、組織活動を復活させた経緯を明らかにした。

第 6 章では、地域のモスクでの学習活動に学生たちが関わったことで、BKPRMI によるクルアーン学習施設が都市部を中心に開設された経緯を明らかにした。1991 年に BKPRMI によるクルアーン学習施設の学習指導に関する研修が、各地で行われた。西ジャワ州ではバンドン市で研修が開催され、これに参加した学生たちによって各地のモスクにクルアーン学習施設が開設されていった。第 6 章では、その実態をバンドンの二つのモスクを通して明らかにした。学生主体で開設されたクルアーン学習施設が、後に地域住民が主体となって運営する形態へと変化したことは、事例から明らかになったことである。

第 7 章では、1990 年代に BKPRMI が作成したクルアーン学習施設における学習指導および運営に関する標準モデルの内容が、従来のプンガジアン・クルアーンと大きく異なることを論

じた。クルアーン学習施設における学習指導においては、状況に応じて学習者が学びやすい指導方法を奨励するとともに、フォーマルな学校での学期制に配慮した年間スケジュールを採用し、学校教育が普及した社会においても取り組みやすい学習計画を整えた。また、クルアーン学習施設の運営に関しては、BKPRMI の傘下のクルアーン学習施設を管理・統制するというよりも、むしろ、個々の学習施設が自律して、クルアーン学習指導にあたることができるようサポートし、BKPRMI の傘下の外の人々が、クルアーン学習施設での学習指導と運営のモデルを学ぶ機会も設けていたことが明らかとなった。

終章では、プンガジアン・クルアーンがクルアーン学習施設で行われる学習として広く認識されるようになると、多くの民間組織が同様のクルアーン学習施設を開設するようになり、政府は、クルアーン学習施設をフォーマルな教育を支えるノンフォーマル教育として認識するようになったことを明らかにした。

以上のように、本研究は、民間のイニシアティブによる『イクロ』の創案とそれを用いた学習施設の全国的な展開の経緯を通して、インドネシアにおけるプンガジアン・クルアーンの組織化について論じた。